



鷹匠という伝統

工藤 正次さん

Kudou shouji

愛鷹ブリーズと

鷹狩りは世界各地にある文化

鷹を飼い慣らして狩りを行うことを鷹狩りといいます。中央アジアを起源に世界中に鷹狩りの文化があり、海外ではユネスコの無形文化遺産にもなっています。道内でも3名といわれる愛好者の一人がビトエに住む工藤正次さんです。

鷹を使った狩りは、日本でも古くから貴族、大名の遊びとして伝えられてきました。鷹は猛禽類ですが、爬虫類と似ていて狩りをするのはお腹が空いている時だけ。狩りの前には糞や筋肉の状態を観察しながら餌の量を調整し、最適な状態に仕上げて殿様に献上するのが鷹匠たかじょうの仕事でした。現在ではこの伝統を守る鷹匠協会やいくつかの流派もありますが、鷹を飼育し、狩りとしての技術を磨く人は大変少ないですね。

6年前にテレビで鷹匠のことを知り、知り合いに円山動物園の飼育員の方がいたことから、鷹の生態や狩りについて様々なことを教えてもらいました。今飼っている鷹はレッドテールホーク(和名アカオノスリ)とってうさぎやリスの狩猟に適している種類です。普段の餌はひよこ、うずら、マウスなどで、小さなひよこでは1日3、4羽も食べますが、狩りの前には絶食して闘争心を高めていくんです。お腹が一杯だと飛び立ったまま戻ってきません。猟期は10月～1月までの4カ月で、主にカモを狙っています。カモも賢いもので、この時期は銃による狩猟ができない人里に寄ってきます。しかし、鷹狩りには好条件です。鷹がカモを仕留めるとすかさず別の餌を与え、獲物は見えないところへ隠します。

当別へ移り住んだのは10年程前です。札幌市

の出身ですが、これまで乗馬クラブのインストラクターをしており、馬を扱う仕事を求めて十勝や富良野、道北と歩いてきました。当別は札幌からとても近いのに、「道民の森」をはじめ、豊富な自然があることが魅力で、初めは春日町に一軒家を求め、住みましたが、もっと自由に動物と暮らしたいと4年前に現在のビトエに移り住みました。農家の納屋も自分で手直しして、作業場や鳥の飼育場にしています。鷹は厳しい環境にも強い生き物。飼育するためには今の環境は理想的です。そしていつか自分の馬を持ち、その馬で鷹狩りをするのが夢です。今、国内ではこれをできる人はいないのです。

手先が器用ですべて自分で作ってしまうという工藤さん。革の手袋、餌の籠、訓練用の疑似餌などすべて自作といいます。趣味を活かし動物達との一体感を感じる生活。これも当別ならではの感じた取材でした。(3月16日取材)